
壊れた世界の能力者

翡白 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた世界の能力者

【Nコード】

N2496Y

【作者名】

翡白 翠

【あらすじ】

『能力革命』、現在から十年前、全人類は、別の次元軸の人間の、『能力』を得た。

自分のために『能力』を使い、弱い『能力者』を、強い『能力者』が虐げる。街に能力で八つ当たりをする。精神的になにも成長していない子供まで能力を持ったのだ。世界は徐々に壊れていった。

そして、十年後、壊れきった世界の、一つのスラムに、妹を捜す男の姿があった……

一話、『能力者』

「あー、この顔の人を知っている人はいませんか？」

馬締まじめ彼方の声が、スラム街に響く。それを聞いた、子供は、少し興味を向けるが、直ぐに食べ物を探しに、うろつく。そのお腹は栄養失調のためか、ぷくぷくと膨れており、皮もかさかさしており、水分の不足が見受けられる。

その横では、見ただけで柄の悪そうな不良がいた。彼は彼方を一瞥すると、少し興味を持ったのが彼方の方へ向かってきていた。服装は所々がファッションとは無関係に破れている。それを見た彼方は、所詮『能力弱者』かと、心の中で毒づく。

「おい、兄ちゃん。ここは俺らの溜まり場なんだよ？」

「この子を見たことがないか？」
不良が彼方に絡んでくるが、彼方は全く気にせず人探しを続行する。

「ああああ？ 調子乗ってんじゃねえぞ！」

いつの時代も不良は不良かと彼方は思う。そして、不良の拳が後ろに引かれ、彼方の腹部へ突き出されようとしていた。

が、不良の拳が彼方に当たるとはなかった。

何故不良の拳が彼方に当たらなかったのか。それは、彼方が『能力』を持つているからだ。現在より十年前、世界は変わった。全人類が『能力』を持つようになったのだ。始めは、本当に少しだけの時間は、神からの恵みだと人々は喜んだ。強い『能力者』が、弱い『能力者』……特に権力を持つている連中に反抗を起こしたのだ。

それにより、世界は荒れた。その状態は、世界全土で起こり、世界は壊れた。荒廃した世界。それが今の世界だった。強い『能力者』が弱い『能力者』から搾取し、弱い『能力者』は、スラム街で、飢えて暮らしている。そんな世界なのだ。噂によると、大財閥の社長だって、スラムで暮らしているという噂が立つくらい、『能力』の

差で没落したものは多いのだ。

閑話休題。

「なあ？ 知らないか？ 俺この子を探しているんだが」

彼方は人の似顔絵が描かれた紙を、不良に見せた。その紙には、彼方と同じ黒髪の、小さい少女が描かれていた。可憐と言うより、かわいらしい容姿だった。似顔絵なので真偽の程は定かではないが、この荒廃した世界でよくここまでと言う笑顔を振りまいている。

「妹なんだよ。三年前くらいから居なくなっただよ」

彼方の年齢は約20歳くらいだろう。その妹なのだから、高校生くらいに違いない。十年前の『能力革命』の後は、高校なんてめつきり減っちまったが。

不良は、彼方の言葉を右耳から左耳に聞き流しているようで、なにも反応していなかった。いや、反応できなかったと言った方が正しいだろう。なぜなら、不良は、自分の拳が当たらなかったことにまだ疑問を持っているようであって、自分の拳をまじまじと見ながら、首を傾げている。

「俺の能力だよ。詳細は企業秘密だ」

仕方ないので、彼方は説明をする。不良ごときに『能力』を教えるても、全く戦闘面では問題がないのだが、いかせん『能力』が広まって、妹……桂花探しの邪魔になっては困る。なので、彼方は能力の出し惜しみはしないが、自分から進んでは言わないというスタイルを、今まで保っていた。

「殺るか？」

彼方は聞いた。延々と自分の拳を見られても困るし、妹探しは迅速に進めたい。

「ああ、すみません」

不良はとたんに小さくなって、敬語を使い始めた。この世界では、『能力』の強さが全てなのであって、『能力』が弱いものは、『能力』が強いものに従うしかないのだ。逆らったら殺されるだけだ。

「おう、それで知っているか？」

再度彼方は聞く。

「知りませんね……この紙を貸してもらえれば、知り合いに当たってみますけど」

「おう、ありがとうな」

彼方は、不良に紙を渡した。帰ってくるとは思わないが、一応は感謝の念も示しておく。

「じゃあ、明日の今の時刻にここだな」

「はい。わかりました」

不良が来る可能性もあるだろう。こちらに『探索』系の能力者が居るのかもしれないのだから。まあ、来ても来なくても、どちらでもいいだろう。そう思いながら、彼方はスラム街を後にした。

二話、猫耳フード（前書き）

三人称がどう考えても、下手です。その練習もかねているので、温かい目で見守ってくださいと、幸いです。

二話、猫耳フード

彼方がスラム街からでてくると、そこにはフードを被った少女が居た。だが、その少女の容貌は、この世界の普通とはかけ離れていた。まず、フードに猫耳がついている。十年より前なら、コスプレとして、ぎりぎり許容範囲外といった感じで、一部の街ならば見かけた格好だ。だが、この世界で娯楽としてファッションを使うものは、めつきりと減った。十年前の『能力革命』以降は、娯楽そのものが衰退した。なにより、余裕がない。虐げられた『能力弱者』はもとより、そもそもの第一次産業をやる人間が減ったのだ。『能力革命』以降は、いくら『能力弱者』が農業をやっても、『能力強者』に盗られる事が続いた。『能力強者』であっても、同じく強い強さの敵相手に、農作物を守りながら戦うのは、簡単なことではなかった。結局今の世界は、昔の狩猟民族と大して変わらない食生活だ。しかも、『放火』系の能力者のせいで、森が減っている。この世界の人々が、野菜を食べられなくなる日も近いのかもしれない。

閑話休題。

その少女は、今時珍しい猫耳付きフードに、ホットパンツ、ニーソックスという、非常に『十年前』の某文化を受け継いだ格好をしていた。そして、どう見たって年齢は二十歳前後だろう。『十年前』に十歳程度だった人間が、今の世界で、オタクに受けるファッションをするのは、珍しいことなのであった。

その服が引き立てる顔は、陶磁器の様に白く、その白い肌と猫耳フードの間から覗かせる青髪が、快活そうなイメージを漂わせている。体はスレンダーな体型だが、この世界では珍しく栄養失調ということもなく、どこか健康的な雰囲気を漂わせているのだった。ムツチリとした太股も、それに付随している。

「蓮花、何かわかったか？」

「はわわ！ ご、ご主人様ですかっ！！！！？？？ す、すみません

「つ、私では、あまり有意義な情報を得ることができませんでした！
本当に申し訳ありません！」

「ドジっ娘っぽく振る舞えば許されると思うなよ？ どうせおまえ
は人の過去を覗いて、勝手にドラマにして自己満足していたんだろ
う？」

「チツ…… ばれましたか」

「何年一緒に旅をしていると思うんだ？」

「三日？」

「三年だ」

「そういえばそうでしたねえ。長かったものです」

蓮花の言葉を聞いて、彼方はため息をつく。

「1000日程度の差はそういえば収まるものなのかよ……」

「ところで、彼方の戦果は？」

あらかさまに、話題の転換を図ってきた。別に冗談なんだからも
つと続けたかった彼方であったが、戻すのも面倒なので、素直に問
いに答える。

「スラムの顔役っぽいのに、探して貰えるってよ。ただ、下っ端だ
から結果はお察ししてくれ」

彼方は正直に今日あったことを答える。正直顔役かと聞かれると
返答に困るが、交友関係が広いものを顔役とおいても全く問題はな
いだろう。

「さすが彼方だねえ。少なくとも確実な戦果を取ってくる。ボクは
中々当たらないからね」

蓮花は『心理』系能力者だ。簡単にその能力を説明すると、念じ
た人物の過去が見れる。対象の視点で、対象がこの世界軸で起こし
たことを見れるのだ。見ている時間は『時間圧縮』が働くので、驚
くほど早く人の過去を見れる。なんとも怖い能力だ。一般的に『心
理』系は嫌われる。何故なら自分の目論見がバレる場合が多いから
だ。もちろん全ての『心理』系の能力者が、人の過去を見たり、思
考を読みとったり、そんな便利なことばかりするわけではなく、鳥

類などの、人物に聞かない『能力』であつたりもする。だが、『心理』系の能力に嵌められた人物は多々居るので、嫌われているのだ。「そうでもないだろ。蓮花が過去を視てくれるお陰で、時々もの凄い当たりを引くからな。当たりの人間だった場合は、俺が逃がさないし」

彼方は『特殊』系の『能力者』だ。『特殊』と言っても、ほかに分類する事ができない能力という意味なので、例えば、頭の中で延々と正確な音楽を流せるような使えない『能力』も、『特別』系に分類される。則ち、分類できないレアな能力をもつて居る人が、『特殊』系に分類される。

彼方の『能力』は、移動だ。自分と、左手にあるものを、何物からの束縛も受けずに、移動ができる。要するに、左手に持った砂を、物質が崩壊しない程度の限りない速さで、打ち出すことができたり、重力に逆らつて空に飛んだりできる。なんとも便利な能力だ。

この二つの能力を使って、彼方と蓮花は、彼方の弟妹であり、蓮花の親友の……桂花を探している。

三話、シスコン

次の日。彼方はスラム街へ再び向かった。

「おい、蓮花。しつかり情報収集しておけよ」

「わかったよー。面白そうな過去がなければしつかりと探すよ」

彼方が釘を刺すが、蓮花は全く気にも留めず、過去を眺めて楽しむ気が満載のようだった。『10年前』と比べて娯楽が少ない現代なのだから、仕方ないのかもしれない。

「程々にな」

完全に説得するのは無理だと悟ったのか、彼方は、軽く諫めることしか出来なかった。

「ああ、こんにちは！」

昨日の不良が明るく挨拶をする。正直、しつかりとした服装でやれば好青年の様に見えるのだろうが、いかせん、服装が所々破けているのである。不良が明るく挨拶など、所詮気持ち悪いだけなのであった。

「おう、何かわかったか？」

彼方は不良に聞く。

「はい、別の街からの移民組で、東の方から来た人に、見覚えがあると。ただ、完全には覚えておらず、臆気な記憶らしいです」

「そうか」

彼方は納得した。彼方が探している桂花の『能力』は、『記憶』系だ。これは『心理』系以上に恐れられている。人間誰でも、自分の内面を見られるのは嫌がるものなのだ。

「おう、ありがとさん」

そう言っつて、彼方は金を不良に投げる。正直貨幣制度はかなり崩壊しているのだが、無いよりあった方がマシという意見が大半を占めていて、こういう依頼の報酬として金を渡すのは、よくある光景

だった。

「ありがとうございます！」

不良は律儀にお礼を言うと、走り去っていった。

揺れる猫耳。彼方は、蓮花を見つけた。蓮花は思考の狭間に陥っているようで、周りのことを何も見ていない。

「おい、蓮花」

彼方は声をかけた。

「お、彼方じゃん」

蓮花は答えた。

「いや、面白い過去があつてさ」

「人の過去を娯楽としてみるのって悪趣味だよ……」

「良い趣味なら、『心理』系の『能力者』が嫌われているわけ無いじゃん」

当然のように言い放つ。彼女が『心理』系の『能力者』になつて、つらい目にあつたことは一度や二度ではない。そのほとんどをこの彼方が救っているのだが、彼女だつてそれを申し訳なく思っている。

「それもそうか。それを思うなら、少しは自重しろよ」

「桂花ちゃんの情報ほしくないの？」

「……………」

彼方は黙つた。黙つてしまった。彼方は妹に弱いのだ。『10年前』までも、弱冠十歳でかなりのシスコンっぷりだつたらしいが、『能力改革』以降は、さらにそのシスコンっぷりは上がった、常時桂花を監視していないと、落ち着かないらしい。もちろん『能力改革』の後に、桂花や蓮花を虐げる人間は居たが、彼方は戦闘に強い『能力』を持っていたので、難なくそれを撃退することが出来た。

だが、それが彼を妹に依存させてしまった理由の一つなのかもしれない。血を分けあつた妹が、命の危機もあつて、守らない兄は居ないだろう。

「彼方つてかなりのシスコンだよな」

「断じて違う」

だが、素直にそんなことは認められないのであった。

四話、急襲（前書き）

戦闘が書きたかったんです。

四話、急襲

彼方と蓮花は、東に向かうことにした。不良の情報を鵜呑みにするのもしかと思うが、他の情報が全くないのである。桂花を探すためには、たとえ犬からの情報であっても使うしかないのだ。

彼方は気配を覚えた。二人は今、先ほどのスラム街から少し東に行った道を歩いている、そこで、確かに彼方は気配を覚えたのだ。一瞬だったが、殺気も感じた。

「敵かもしれん……」

彼方は、蓮花に忠告をする。ここは、『能力者』の世の中だ。食料や情報を求めて、他の人間を襲うことは、珍しくない。そして、蓮花はこの世界では珍しい高級品。猫耳フードを被っている。そのことから彼方たち二人組を『能力強者』と判断するのは難しいことではない。

「そうですか」

神妙に蓮花は頷いた。蓮花の能力は戦闘には使えない。なので、戦闘に関しては彼方に頼るしかないのだ。そのことを悪く思っているが、『能力』は十年前から変わらないのだ。変わった人の話など聞いたことがない。勿論十年の間で能力の使い方がうまくなった人の話はよく聞くが、なかなか戦闘用ではない『能力』を戦闘用に使うのは難しいのだ。

「来る!!」

彼方が叫ぶ。そうすると彼方の右斜め前から人影が襲来する。蓮花はいったん隅に避け、戦闘の邪魔にならず、なおかつ捕虜にもならないように、周囲を警戒する。

「暗い!？」

彼方の顔面前方に、黒い霧が架かる。これが敵の能力か!? 彼方がそう判断する間に、敵は武器を構え、攻撃を開始する。

「死ねえええええ!!!!」

敵の声は、彼方の耳に響く。周囲の音から、彼方は敵の武器は銃と判断。この距離から考えてサブマシンガンだろう。彼方は自分の体に能力を発動する。

そして、彼方の体は上方に動く。黒い靄の場所からは離れたと思っただが、いまだに追跡してくるのは、敵の能力の範囲が自分の目の前方だったからだろう。

敵の銃弾は、先ほどまで彼方がいた場所を通過する。これで敵のマガジンに銃弾は一時的になくなる。敵のリロードの間に、彼方は自分の左手を、顔面前方にかざす。そして、能力を発動して、黒い靄を、全方位に移動させ、靄を晴らす。

リロードが終わった敵が、彼方の顔面から靄が消えているのを見て、驚く。

「な、なんだとお!？」

驚きようから少し品がないな、と、彼方は思いながら、敵の顔面に目を向ける。そこには、中年に差し掛かっている程度の年齢の男がいた。

そして、特徴的なのはその服装だった。全身が青を基調に彩られている服を着ていた。そして、その服は、10年前の警察のような雰囲気をもとっていた。

「『組織』か？」

彼方が口を開く。その服は、『組織』の制服だ。『組織』とは、『能力強者』と、『生産』系の能力を集め、それだけで国を作ろうとしている存在だ。全国の『能力弱者』は、時々『組織』の人間に物品を奪われるので、『組織』の人間を嫌っている。

「文句あるか？」

男が口を開くと同時に、またもや彼方の眼前に、黒い靄が架かるが、一瞬で彼方は左手をかざし、靄を消す。それを見て、男が舌打ちをするが、すぐに気を取り直して、銃の照準を彼方に合わせる。彼方は一瞬で空中から下に降り、砂を左手に握る。男が照準を、下に行った彼方に合わせなおすが、彼方の次の行動のほうに、数刻早

かった。彼方は左前方に自分自身を移動し、左手の砂を、男の方へ音速の速度で移動させる。

瞬間。

男の心臓は砂によって撃ち抜かれ、そこから血を吹きだしていた。男の銃弾が彼方に向けて発されることはなく、彼方はそこに立っていた。

「『組織』の下級戦闘員か。『能力』は黒い霧。微妙だな」

彼方はひとり呟き、

「おい、蓮花。出てきていいぞ」

「ああ、ありがとな」

蓮花は彼方に感謝をする。『組織』は、最近『心理』系を集めている。『組織』内でも『心理』系を持っている人間のほうが上になる。なぜなら『心理』系を持つていれば、同じ『心理』系で、心の中は見抜かれにくくなる

。見抜かれたら見抜き返す。見抜かれなければ見抜かない。そのような暗黙のルールが組織内にあり、それを破ったものは他の『能力者』の制裁を受けるのである。ただ、『心理』系を持つていなければ、『心理』系の能力が使われたことが認知できないので、『心理』系を持つていない人間は、心の中が見抜かれ放題なのだ。最近急速に勢力を伸ばしている『組織』内の人間は、『心理』系をほしがる。そして、今回は蓮花にその白羽の矢が当たったのだ。

「なんとというか、不幸だったな」

「まあ、仕方ないよ。ボクだって、『心理』系を持っていて便利なこともあるんだし。組織のために使うよりは、彼方とか、桂花ちゃんを見つげるために使ったほうが有意義だしね」

「おう、ありがとな」

戦闘も終わったので、二人はまた、東に向かって歩き出した。

五話、『組織』

彼方と蓮花は、不良から情報を聞いたスラム街から、少し東に行つたところで、新たなスラム街を見つけた。

「これは酷いな……」

彼方の口から思わず言葉がこぼれ出た。状況を一言で表すなら悲惨。スラム街の飢えは、一つ前の場所よりも非常に大きかった。人々が食べ物求めてゾンビの様にさまよい歩いている。

「どうしたんですかね……」

思わず蓮花も同調する。二人が今までみてきたスラム街の中でも一番を争う酷さだった。そして、このようなスラム街は、基本的に状況が似ている。

「おい、ここは何故ここまで酷いんだ」

取り合えず、手近にいた男に、彼方が聞く。その男も、針金のように体が細く、満身に食べれていないことは一目瞭然だった。年は飢えが酷く、よくわからないが、背丈的に考えて、成人はしているだろう。

「『組織』……じゃない？」

『組織』。『能力強者』の集団。『能力強者』は、『能力弱者』を虐げる。『組織』に入れば、ほとんどの『組織』が確保している、『農業』系の能力で、飢えは防げる。数人の『農業』系が居れば、1000人の飢えが防げるといわれている。それほどまでに『農業』系は農業の効率が良い。だが、その恩恵を『能力弱者』は、授けられない。正確に言つと、『組織』に入っていないものは授けられない。『農業』系の能力者の数は、意外と多い。『心理』系に比べ、圧倒的に多い。『記憶』系は、多い少ないではなく、完全なるレアケースだ。『能力』の種類分けがしやすいとだけの理由で、『系』といわれている。規模だけで考えると、『特質』系に入っても全がおかしくない。

閑話休題。

要するに、『農業』系の人数は多いが、『組織』が持つ、『能力者』の数も、馬鹿にならない程多いので、『農業』系は、ほとんど『組織』に保護されている。なので、『組織』に入れば飢えることはないのだ。ただ、飢えないからといって、人間としての欲求は、依然として存在する。睡眠欲を得るのは、住を確保すればいいので割愛する。『組織』に入れば、家にも住める。付近の『能力強者』の殆どが所属しているので、まず壊されない。時々壊しにくる輩が居ても、余程強い『能力強者』ではないと、撃退されるのがオチだ。次、性欲は、基本的に充実している。充実しているというと、少し言い方が変になるが、この世界は娯楽が少ないのだ。娯楽といえるものは殆どが『十年前』に廃れた。今でも残っているのは、ルールが簡単なオセロくらいなものだろう。一部の酔狂な人間が将棋をやるといふ話も聞いたことがある。そして、娯楽が少ない世界で、人々が娯楽としてやることは、一つしかないだろう。ここは、お察しの通りなので割愛する。天の邪鬼な人は、独自の解釈をするかもしれないが、それもまた一興だろう。

では何故、人間の三大欲求を得ている、『組織』所属の『能力強者』が、『能力弱者』を、虐げるのか。簡単な話である。優越感。闘争心。自己顕示欲。様々な要因があるが、人間は他者を見下すことで、己を律する生物である。そして、共通の敵を見つけるほど、団結はしやすい。『組織』は、『能力弱者』を虐げることで、自分の三大欲求以外の欲求を制御し、なおかつ団結心をあげているのだ。要するに、そんな『組織』に狙われたスラム街は、目も当てられない悲惨な状況になる。『能力強者』の目から逃れて育てた作物は簡単に略奪され、少しだけあった食うものが簡単になくなる。森は荒らされ、恵みなど期待はできない。川は、厳重な『組織』の管理下におかれ、魚は『能力強者』しか食べれない。しかも、荒らしたといっただけの理由で、『能力強者』がスラム街を荒らすのだから、住むところさえ酷い有様になる。『組織』に狙われたスラム街は、

酷い有様になるのだ。そして、そこに住む人々は、逃げ出せば『組織』の人間に殺されるので、ただ食べ物を探してさまよう人間となり果てるのだった。

兎に角。今、彼方と蓮花は『組織』かと疑いをかけられたのだった。

「俺は『組織』じゃない。『旅人』だ」

『旅人』、『組織』他、その他諸々の影響を受けない、自由人、『能力者』が蔓延る壊れた世界で、上位のものも、下位のものも、どちらの影響も受けずに、人間の食物連鎖から外れて、自分の道を歩むもの。

「そう……でしたか」

『組織』の人間ではないと聞いて、安心したのか、痩せこけた男は、安堵したような表情を浮かべる。そして、今の状況を冷静に理解したのか、表情が安堵から、何かを期待するような目になる。

『旅人』は、慈悲深い。影響は受けないが、助けには施しを与える。そして、『旅人』は、誰でも手や足として使う。要するに、この男は、彼方が自分に何か依頼をして、それを自分が達成した際の褒美を期待したのだ。

それを感じ取ったのか、彼方も何か依頼を探す。傍らの蓮花は何が起こっているのかを理解していないのか、首をかしげていたが、すぐに考えても意味がないと理解し、無表情に変わる。彼女もまた『旅人』だが、面倒ごとは全て彼方に任せてきたのだ。それにより引き起こしたトラブルは数知れずだが、本人は何も反省していない。「ああ、そうだ。この『組織』について教えてくれないか。色々とな。あと、こんな奴を見かけたことがないか？」

そう言うと、彼方は懐から一つの紙を出した。それは、ひとつ前のスラム街で見せたものと全く変わらない。それを見ると、男は驚いたように顔を彼方の方へ向け、

「これ、『組織』の幹部ですよ！」

彼方と蓮花は驚いて立ち尽くした。

六話、過去と決意

彼方は、その言葉が信じられなかった。囚われていたじゃないか、俺と桂花と、蓮花は。何故、忌々しき『組織』の幹部に、桂花がなるのかの、理由がわからなかった。

約七年間。彼方と桂花と蓮花は、『組織』……『世界を立て直す者達』に、囚われていた。その『組織』は、名ばかりで、すべての人員が、世界を立て直すためではなく、自分の能力をいかに効率よく使うかを考えていた。そして実行していた。その『組織』に、『能力強者』一対一より、数を手懐けて、数の暴力で、自分の私腹を肥やそうという者がいた。そいつは、大人の『能力強者』には、全く目を付けず、能力をあまり使わない子供の『能力強者』ばかりをねらい、自分の手駒としていた。そいつの名前はなんといったか、よく覚えていないが、自分をモトナリと名乗っていたことは、臍気ながら思い出せた。

モトナリは、彼方達三人組を、特に可愛がった。当然だ。彼方達は、子供にしては『能力』の制御がしっかりしていて、なおかつ強い。彼方は『戦闘』系でも、屈指の強さを持っており、蓮花、桂花は、『心理』系と、『記憶』系。情報戦などで優位に立て、なおかつ制御できる者が少ない、レアな能力だった。

だが、その待遇は決して良いとは言えなかった。子供だから……という言い訳が聞かれるはずもなく、彼方は明くる日も明くる日も戦場に立たされ、モトナリの敵となる者を、討ち滅ぼしていった。今の『能力』制御が完璧に近いのも、そのときの経験のお陰と言えるだろう。

「くそつ、何でなんだよお！」

彼方は地面に吐き捨てるように、声を荒らげた。その声に一瞬周りの人間が吃驚とするが、すぐに興味を失い、自分のやっていることへ戻っていく。

「大丈夫ですか？ 彼方君」

後ろから声が聞こえてきた。彼方が後ろを振り向くと、そこには蓮花が立ち、こちらを睨んでいた。

「どうした？」

蓮花の真意を計りかねるように、彼方が聞く。

「どんなときでも妹を助けるのが、兄としての役目じゃないの？」

彼方は思い出す。過酷な環境の中での、妹の笑顔を。彼方は思い出す。自分の妹への思いを。彼方は気づく。彼女も自分の妹のため、必死になって旅についてきてくれるということ。一瞬の驚いた顔の後、意を決したように唇に笑みを浮かべて……

「当然だな」

当たり前のようにそう言い返し、

「助けにいくぞ……桂花を」

そう彼方がつぶやく。そして、蓮花もそれにならずき、

「私たちが桂花を助けなくて、誰が桂花を助けるっていうのさ。桂花だって好きでその組織にいるかはわからないだしね」

「ああ、桂花が無理矢理幹部に仕立てあげられている可能性もゼロじゃないしな！」

「ええ。桂花は二人の手で救い出すのよ！」

二人は頷き会い、走り出した。『組織』の方向へ、妹のいる方向へ向かって。

七話、屋敷

見つけた。彼方と蓮花の二人は、見つけた。その眼前に広がるは、とても大きな屋敷。壊れていないのに、しつかりと現存しているところを見ると、ここら辺の『組織』は、この屋敷を活動拠点として、周辺の『能力弱者』に暴政を布いているのだ。

「ここか……」

彼方の口から声が漏れ出た。それに「ああ」と、蓮花が付随する。そう、こここそが彼方の妹、蓮花の親友、桂花がいるのだ。

そして、二人は、堂々と門を開けた。

「な、なんだっ！？ おまえ等は誰だ！？」

警備の人間が声を荒らげる。その声は広域に拡散し、屋敷一体に響きわたる。

彼方は、心の中で、毒づいた。便利な『能力』があつたものだと。彼方の考えでは、その能力は、声を大きくし、広いところに拡散させるものだろう……

そして、その能力を使った答えは……

人間が走り出してきた。一部途轍もない速さの者もいる。きっと能力なのだろう。二人はそう結論づけた。ざっと出てきた人数は、二十名ほど。彼方一人で相手にできるかは能力次第だが、厳しいかもしれないかった。

そして、蓮花はそそくさと逃げ出した。蓮花には戦つたための『能力』がない。過去を読みとって、敵の弱点を晒し続けることはできるが、それをし続けて人質になったら元も子もない。しかも、人間の内面に干渉する『能力』は、集中力が奪われることが多いのだ。

逃げる蓮花に気づいた警備兵数名が、蓮花を追う。

だが、

「俺がそんなことをさせると思つか？」

警備兵たちは気づけなかった。彼方の移動に。いつの間にか消え、いつの間にか現れる。瞬間移動というべき速さ。そして、

「まあ、とりあえず倒れとけ」

妹を追い求める兄に、勝てる警備兵はそこには居ず、蓮花を追った警備兵数人……七人だったが、そいつ等は彼方の『能力』により、音速ともいえる体当たり付きの拳で、地面へと倒れた。

「がっ……」

警備兵たちが呻き声をあげるが、彼方は見向きもしない。逃げていた蓮花は、ちらりと青い髪の毛を揺らしながら振り返ったが、彼方ならば当然と、納得したような表情で、安全地帯を探して逃げ始める。

倒れた兵士はなにが起きたかわからず、声を上げるだけで、なぜ倒れているのかの判断が出来ていなかった。

故に、この場で一番彼方の危険性を見抜いたのは、警備兵十三人。今まで戦ってきた、『組織』に所属していない中途半端な『能力強者』とは全く違った雰囲気と能力に、恐れるだけだった。

だが、さすが『組織』を守っていた警備のプロ。動き出すのは迅速だった。蓮花を倒そうとしても彼方に阻まれるだけだと即座に判断し、十三人という現存勢力で、いかに彼方と戦うかを目配せだけで話し合った。下への教育が行き届いている『組織』ほど怖いものはないと、モトナリに散々言われていた彼方は、この人間たちがそれなのだ判断する。故に、最大限の警戒を以て……空に飛んだ。

厳密にいうと、重力に縛られずに上方方向へ移動し、落ちない程度の移動の力を保っているだけなのだが、空を飛んでいるのと大した変わりはない。

それをみた警備兵は、驚いた。二つ以上の『能力』なのかと考えた。だが、そんな人間の前例は聞いたこともなく、同じ能力なのだと納得させる。そして、そのうちの一人が、目配せによる作戦通りに動き出す。

即ち、一撃必殺。

疾風のような速さを持つ彼方は、防御力が弱い。故に一撃必殺を
考え、一番攻撃力が高い警備兵を。一人のサポート『能力』による
強化の後で送り出したのは賢明といえる判断だろう。

残りの10人……突撃をする人と強化をした人と声を拡散させて
いた人以外の『能力者』は、戦闘的なサポートとしてそれに続く。
拡散は大きな音で驚かせるくらいしか使い道がないので、戦えなく
ても仕方がないだろう。まあ、何はともあれ、彼方と、十三人の警
備兵との戦闘の火蓋は、切って落とされたようだ。

八話、迎撃（前書き）

超能力バトルが書きたくてこの話を書いているわけですが、あんまバトってない……のか？

みたいな疑問点ができました。だが、これはれっきとした……訂正。これは拙作だが、一応は能力者バトルです！ うん。敵の能力出すの忘れてたんだ。

八話、迎撃

彼方は向かってくる男を一瞥してから動き出す。まずは制空権を放棄し、下に降りる。突撃者を空にあげようと思っていたサポートの『能力者』が、一瞬驚くが、直ぐに頭の中で内容を整理し、こっちが制空権を握ったほうが普通に有利だと、突撃者を空に飛ばそうとする。

だが、

突撃者は、地面に倒れた。

「なっ……」

突撃していた人以外の警備員の声が漏れた。

突撃していた人間の頭には、砂で撃ち抜かれた跡があり、その近くには砂と血が転がり落ちていた。目は虚空をむいており、なんの表情も見受けられない。

一瞬でこれほどの惨状を生む男に、たかが『組織』の警備員程度が、どうやって歯向かうことができようか。

警備員は、恐怖した。

逃げる逃げる。脳の中枢に自らが放つ警告が響きわたる。頭痛がする。警備員は、完全に怖気付いた。勝てるわけがないのだ、『旅人』に。

『組織』に真っ向から歯向かうような、イかれた『旅人』に、たかが警備員風情は、一矢報いることさえ許されないのだ。

「この程度かよ……」

かなたが吐き捨てるように言った。それが合図となったのか、警備員たちが、我先にと庭に散り始めた。

が、彼方はそれを許さない。全身を加速させ、一人一人の懐へ入り込む。そして、腰から短剣……ステイレットを取り出し、心臓に向かい一つ突き刺した。

「ぐはっ……」

うめき声が漏れた。同時に散り散りになっていた警備兵が同時に刺された警備兵と彼方の方を向く。それと同時に、彼方は腰から数本のステイレットを出し、

『能力』を発動させた。

ステイレットが、四方八方へ、音速となんら遜色がないスピードで突撃していく。なんの迷いもなく、重力その他、彼方が与えた推進力以外の影響は何も受けずに。

グサツグサツ

と、肉が断ち切れる音がする。その先端だけが尖った短剣は、見事に心臓を刺し、四人の警備兵を天へと誘った。

残りの警備兵は、驚愕の色を表情に浮かべ、恐怖の思いを頭と心に焼き付けた。もう振り返らない。逃げ出す全力で。走る。遠くへと。

だが、

自分を加速すれば音速など容易く超えるスピードを出せる彼方から、逃げれるものは如何程居るのか？ 冷静に考えて、ほとんどいないだろう。いるとすれば、自分を加速し、かなたと同じ音速並みのスピードを出せるものや、それこそ瞬間転移を使うことができる『能力者』位なものだろう。

要するに、彼方から逃げれる警備兵など、どこにもいなかった。一瞬で刺したステイレットを回収し、直ぐに警備兵たちに向かつて走り出す。そんな彼方から逃げれるものなど、ほとんどいないだろう。

結果、警備兵は、全員が死んだ。刺し殺す事に特化した短剣のステイレットの一撃を、音速並みの速度で受けて生き残れるものがいたら、それこそ驚きだ。

「こんなものか」

ステイレットを全て、腰の剣入れに仕舞い、彼方は虚空を見ながらつぶやいた。そして、

「お疲れ様」

草が長く生えたところで隠れていたのか、猫耳フードに、パラパラと木の葉を着けながら、蓮花が出てきた。少し顔を振ると、青い髪から流れ落ちるように木の葉が落ちてくる。

「こんなに長い間能力を使ったのは久しぶりだ。結構体にくるものがあるな」

『能力』を使うには、精神力がいる。それを二十人も警備員を殺すまで使っているのだから、とても疲れただろう。

そして、彼方が少し休憩と、地面に腰をかけようとした時だった。窓が空いた。

そこから見えたのは黒髪だった。

彼方がもっていた写真を大人にしたような感じだった。

即ち……

「桂……花……？」

偶然にも窓の方を向いていた蓮花がそう呟くのも、無理もないことだったのだろう。

九話、執事

彼方の耳に、妹の名が聞こえる。その言葉を発した人、蓮花が向いていた先は……

上！

そう理解すると同時、彼方は上を向く。隣にいる蓮花はまだ呆然と、上を見たまま顔を動かさない。

「桂……花……！？」

「おにいちゃん！？」

彼方と、窓の向こうにいる少女、桂花の声が発される刻は同じだった。

三人が固まる。

彼方と蓮花は、ここに桂花がいるのでは？ という希望を持ちながらこの屋敷にきたはずなのだが、それでも三年間も見つからなかった大事な人をいざみつけるとなると、驚き、固まるようだ。

桂花の固まり様は……驚きと言うより、困惑が勝っているように見受けられる。なぜここに兄と親友が？ そんな感情が表情から感じられる。

「おまえ……どこ行ってたんだ？ 何で組織なんているんだ？ なぜ俺に連絡の一つもよこさない？ 『移動』系の能力者はいなかったのか？ お兄ちゃん心配したんだぞ」

二十歳近くの男からお兄ちゃんという言葉がでたら気持ち悪いだけだ。

と、純粹に蓮花と桂花は、感じたふが、このシスコンの彼方が三人が固まっていた所を溶いた。

そして、ご自慢ではないがシスコンっぷりを、三人にさらけ出しながら、矢継ぎ早に質問を繰り返した。

「え、えっと……」

質問をされた桂花は、答えるのに悩んでいるようだった。言葉を

選んでいるというより、言って良いのか悪いのかわからないという感じだった。

「まあまあ、桂花も見つかったことだし、こんな遠くで話すより、近くで話さない？　と言うわけで、桂花、屋敷に入れて？」

軽い調子で蓮花が言う。

確かに、屋敷の二階と地上では話しにくいだろう。蓮花がその提案をするのも、尤もなことだといえた。

「え、ええ、良いわよ」

多少困惑しながらも、桂花が答えた。

その屋敷は、調度品がすべて高級かつ清潔に保たれており、ほんとうに現代かと疑いたくなるものだった。一つ一つが現存するのすら疑わしい。そういう類のものだった。

その一つ一つに、目をとられ、なおかつ壊さないように注意しながら、彼方と蓮花は傍らの執事の誘導の下歩いていた。

階段の最後の一段を上り終え、桂花の部屋がまた一步近くなる。

それに会えることの充足感を、彼方は感じていた。

「ここでございます」

白い髭が生えたとこまでも古風な執事が指した先は、今までのドアとは違う雰囲気を感じているドアだった。

「桂花は、このトップなの？」

堪えきれずに蓮花が聞いた。その質問を聞いた執事は、目を光らせながら、

「はい。そうでございます。桂花お嬢様は立派な信念の下この、『組織』、『統一者』を率いております。そして、すべての……」

ガチャッ

ドアが開く。それにより、執事の話が一時中断する。

「紫苑。そこまでいいわ。後は私が話す」

ドアからでてきたのは、紛れもない桂花だった。

十話、復讐

彼方の目の前には桂花が座っている。その後ろでは、説明を遮られたことを残念そうにしながら、紫苑が立っている。

彼方は、木製の細工が施された椅子に座っており、その横でも同じような椅子に蓮花が座っている。

外から吹く風がカーテンを揺らす。桂花の長い黒髪も揺れたような気がする。蓮花の猫耳は……風などでは揺れないな。

「さて、どこから話したのかしら……」

話しくそくに、桂花が切り出す。なぜ『組織』に、桂花が入っているのか。その疑問は桂花を見たときから何時までも頭にまとわりついていた。桂花に会うまではぐだぐだ考えずに、会うことを優先しようと決めたが、いざ会ってみると、その疑問がまた蒸し返されたような気分になる。

「単刀直入に言うわ。私はこの『組織』、『統率者』を率いているわ」

なぜ？ その疑問が彼方の頭に湧く。

「な、なんで桂花が組織を!？」

その疑問は同じように蓮花にも出たようで、椅子を立ち上がり、前にあつた机に手を叩きつけながら、疑問の声を張り上げる。

「私たちはね、『組織』に恨みがある人たちで作られているの」

じゃあ、なぜそんな人が組織を？

「そして、この『統率者』の目的はね……」

自分たちを虐げた『組織』への復讐よ」

目には目を、歯には歯を。同じ『組織』には『組織』を、ということか。数の暴力で圧倒されることはそれによりまずなくなる。だが、

「なら何でおまえ等はスラムを虐げているんだ？」

俺は思わず疑問が口に出ていた。あそこにいた男の姿。あれを見

て、この疑問を考えない人間はいないだろう。居たとしても、自己中心的で驕っているナルシストな『能力強者』くらいなものだ。そして、それを実行するのは……ナルシストか、利益だけを追求する非人道的な人間か、しかたないと言いつつ、続ける愚者か。そのくらいのもものだ。

彼方は桂花が好きだ。家族愛的な意味で大好きだ。だが、過ちを許すほど、甘くはない。

「……………」

桂花は歯ぎしりをする。無言の部屋に、歯ぎしりだけが響く。

隣の蓮花も今は何も言うまいと、飄々とした態度で座っている。

「仕方な……………」

「何がだ？ 仕方ないから人を虐げていいのか？」

説明が尋問へと変わっている。

「紫苑……………」

諦めたように桂花がつぶやく。

「……………!!!?????」

窓の下にいきなり気配が表れた！？ 外だぞ！？ おい、なぜだ

！？

彼方は混乱した。気配がいきなり表れたからだ。彼方はかなりの腕を持つ『能力者』だ。戦闘経験も豊富にある。その彼方が気配を感じ取れないほどの相手。

「俺を殺す気か？」

「復讐のためです」

激しい兄妹喧嘩が始まりそうだった。

十一話、黒装束（前書き）

自分のサブタイミスの多さに泣けてくる。

十一話、黒装束

疾風^{はや}い！

彼方は純粹にそう思った。桂花が護衛を彼方と戦わせることを示唆してから、ほんの数瞬も経たず、こちらに向かう。しかもその速度は有り得ないほど速く、何らかの『能力』だということは、疑うべきもない事実だと感じた。

そして彼方の首筋に迫るのは……

ナイフ！！！！

「ちいつ！」

瞬間。

よける！避ける！逃げる！

彼方は自分の全身に『能力』を使い、後方方向へ動かす。ナイフは目の前を通り過ぎ、空気を咲く音だけが聞こえた。

彼方がそこで見たのは、黒。真っ黒な装束。ただ右手の先にだけは銀色がシャンデリアの光を反射している。

彼方は直ぐ様反撃へと転じる。全身を敵の方向へ動かしながら、右手にかかる力を増やし、右手のパンチを『能力』で演出する。

が、それは普通のパンチとは明らかに違い、速い。明らかに速い。常人に見切れと言われても無理だろう。だが、黒装束は避けた。

そして、迫る、ナイフが。目の前へ！

それになんたは反応し、左手を腰に動かす。そこで『能力』を発動すると、腰にあったステイレットがナイフの方へと動いた。

ガキンツ！！！！

ナイフとステイレットが衝突。響くのは無機質な金属音。二つの短剣は床へと転がり、丁重に装飾された部屋に、異質感を漂わせる。

「同型か？」

似ている。彼方はそう思い、敵に質問を投げかける。

「加速と移動の違いはあるが………なあっつ！！！！！！！！！！」

最後の掛け声と共に黒装束が彼方の方へ駆ける。自身に『能力』で加速したためだ。

「お前みてえな奴に俺の妹を任せることはできねーよ」

そう彼方は言い……、右後方へ『能力』で移動した。それをチラリと一瞥した黒装束は、一瞬で加速を取りやめ、偶然か先程彼方が立っていた場所へと停止。そこへ彼方はステイレットを移動させる。男はいつも簡単にそれを加速したナイフで払いのける。

が、彼方は追撃した。

ステイレットと自身の体の攻撃は二重。相手に手間取らせる時間は二倍。そして勝機は二倍？

だが、有効な戦術なのは確かだ。

単純な体当たり。が、移動により速度が上がったそれは、いつも普通の体当たりを凌駕。対応は必死。速く、疾風く。迅速に勝負を彼方は決めるつもりのようなのだ。颯爽とした重い体当たりが、今黒装束に……

当たった。

簡単に。容易く。

否。当たったのではない。

黒装束が、当たりについてたのだ。

結果、吹き飛ばされたのは……

両者だった。

ゴロゴロゴロと、人間が転がる音が聞こえた。それは二重奏になっでいて、二つの人間が転がっていることが、手に取るようにわかった。そして、その転がった場所には赤色の液体が付着。両者が負ったダメージがわかるようだ。

「なかなか……やるなあっ！」

黒装束が怒りに身を任せ、怪我を厭わずに彼方へ向かった、が。

ドスンッ

さらに黒装束は倒れた。そこには紫苑が立っていた。

動いていたのは手刀。

「血が昇っては駄目ですよ。『統率者』は、死亡者ゼロが大前提なんですから」

自分の身を厭わなかった仲間に対して、忠告しているようだった。そして、彼方の方へ振り向き。

「こちらはまだ戦える人間がいます。貴方はもう戦闘の続行が不可能でしょう？ そちらのお嬢さんも戦闘員ではないようですし、今日はお帰りになられたら如何ですか？」

丁重な言葉遣い。だが、それによって表れているのは、彼方たちの敗北だった。

「わかった。そうするよっ」

そう捨て台詞を残すと、

「おい、蓮花、いくぞっ」

残り少しの体力を振り絞り、蓮花に合図。

「わかった」

殊勝に蓮花もつなずき、彼らは敗北を認め、屋敷から立ち去った。

一二話、戦闘狂者

敗北を喫した後、彼方たちはスラム街へと戻っていた。不思議とそこに落ち込んだ様子は無い。

「倒さねえとなあ。二人とも……」

戦闘狂者バトルリックそんな言葉が似合う目をしていた。簡潔にいうと、燃えていたのだ。黒装束と紫苑という執事との再戦に。だが、このままでは勝てないことは彼方もわかっていた。

「やれやれ」

隣にいた蓮花が呆れたように呟く。いや、実際呆れているのだ。過去にモトナリに囚われていた頃から少々戦闘狂者の片鱗をちらつかせていたものの、『旅人』になってから完全覚醒した。自分と同等かそれ以上の敵となると、途端に燃え出すのだ。格下は一瞬で殺すくせに。

「修行……久しぶりに必要だなあ……どこへ行くのかあ？」

狂ったような声色で、いや、狂った声色で彼方が呟く。そこにはすでに外界を遮断した姿しか映っておらず、周りからの影響は本能的に頑として否定しているようであった。なにも事情を知らない人間からみればクスリでもやっているのではないかと思うだろう。実際『能力革命』後はクスリをやる人間が増えた。ただ、生産が圧倒的に追いつかないので、『能力弱者』のクスリ自殺は後を絶たない。まあ、実際クスリなどやっていないので、自殺の心配などは全くないのだが、取り憑かれたように、修行や戦闘と呟く彼方の姿は確かな狂気を滲ませる。先行き不安な自分たちの旅に、蓮花は辟易と溜息を一つもらした。

「み、見つけた！……！！」

叫びに気づいたのは蓮花だった。彼方はまだ取り憑かれているように讒言うわごとを繰り返している。そして、声が放たれた方向を蓮花が向

く。そして、

蓮花の顔が真っ青になった。

過去の記憶がフラッシュバックする。他人の過去を延々と、ただ詰まらなく読み続けた日々。言われたとおり、ただなにも疑問も持たず、読んだ過去を伝え続けた日々。その時にあった顔。それが今確かに蓮花の目の前に現れていた。

モトナリだ。

ただ、昔来ていた若干、自己愛者風の優雅かつ絢爛なもので全身を固めていた筈が、今ではその形を完全なりに潜めている。そこにあるのは、

『能力弱者』

その四文字だった。昔人を率いていた面影は何もそこには無く。ただあるのは落ちぶれたと言っただけの姿。豪華絢爛とは何も縁の無いような質素で破れた服を着ており、昔のようにプクプクと太っていた腹部は、今ではやせ衰え骨のようだ。

「モト……ナリ……っ！！！！」

蓮花は確かな敵意を滲ませながらそれを言い放った。当然だ。蓮花はこの男のせいで『能力中毒』となったのだ。自分の手に余る力。それを毎日のように使わなければ禁断症状がでて、頭の中が狂い出す。

昔モトナリの下で、能力を使い続けた弊害だ。毎日何人も、何十人というときもあった。そこまで能力を使い込んで、『能力中毒』になつてしまった蓮花は、確かな敵意をモトナリに持っている。だが、隣の男、彼方は、

「師………匠っ!？」

いきなり狂化が解除されたように叫んだ。そうだ、昔モトナリの下にいたとき、彼方はモトナリを師匠と呼ばせられていた。そんな昔の記憶が、臍気ながら戻ってきた。

一三話、修行（前書き）

三人称難しい

一三話、修行

右前方！

そちらから迫り来る槍を左手で触れ、『能力』を発動させる。移動された槍は、そのまま打ち出された場所へと収納される。

そんな修行をしている彼方を、蓮花はつまらなそうに見ていた。

右後方。右前方。下方。上方。右上。右下。右方。

様々な位置から槍が迫り来るのを、彼方はは簡単に移動させる。

それを見ながらのんびりと貯めておいた過去を見るが、今日は特に面白いものがあまりない。過去読書中毒で舌が肥えたのか、『能力革命』の後に不仲になり、殺し合いを始めた兄弟など日常茶飯事のように読み取れる。

つまらない。つまらない。

なぜ説得もせずに戦いで解決しようと思うのか。それが戦闘狂者の宿命宿命なのか。蓮花は読み盗る。過去を。たくさんの過去を。いや、読み盗った過去を頭の中で反芻する。延々と何回も。そして思う。

力で解決したって、あるのは全て終わりだと。

嗚呼、届かないんだろうな。目の前の一人の男の子には届かない。いつまで立っても無垢で、力が全てを支配すると刷り込まれた少年には届かない。何時届くのかな。

蓮花は過去を読み続ける。

はっ、はっ。

汗が自分の力となって、少しずつ満たしていくのがわかる。勝つんだ。俺は勝つんだ。

狂気。

それが彼方を支配する。昔の習性は簡単に失われることはなく、昔ほど覚えがよくない身体に、必死で努力を叩き込む。それは昔ほどではないが、少しずつ彼方の身体に力として入り込む。戦いへの

羨望という狂気と一緒に。

一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ。

左手の発動と共に、ひとつずつ経験がたまっていく。

もつと、もつと、もつと。強欲なほどの向上心。だが、それは全て狂気により彩られ、健全さの影も見当たらない。

急に。

槍が止まった。

「？」

疑問の表情を彼方が浮かべる。

「よし、彼方今日の訓練は一旦終わりだ。一日にやりすぎても毒だしな。それと一つの使い方を一極化して修行するのも良くない。左手の反射だけではなく、ステイレットの使い方や、自身の移動の細かい調整。他にもやることは多くある。お前の能力の汎用性はとてつもないからな」

だが、もつと。もつと。

彩られた狂気は簡単に引くことを許さない。

もつと、もつと。

「待つてください！ 俺はまだやれます！ させてください！ 訓練、修行を！」

悲痛な叫びが響きわたる。

ああ、彼方も狂ったか。

敗北は人を狂わせる。蓮花だって、狂った。安定された過去の供給からの敗北。『組織』を抜け出したのは自分の意思だ。だが、果たしてこの生き方でよかったのか？

あのまま生きていたって十分食っていった。偶然な食料の供給先がでなければ自分たちはいま飢えているのではないか？ すでに死んでいるのではないか？

わからない。わからない。

たらればの話をして仕方ないのは理解できるが、しないと止め

られない。

愛しい男性オトコが狂うのは、嬉しいのか？ 悲しいのか？

ああ、またこっちに思考が来た。もうだめだ。没入するんだ。過去へ。

また面白そうな過去を探す。あるのだろうか。一番面白い過去は、目の前にあるのではないのか？

一四話、人数

「ありがとうございます！」

隣の彼方が清々しそうに挨拶をする。それを一瞥した蓮花は下らなそうに目を宙に泳がせる。

捕らえていた人間を師と仰ぐ程に狂った同行者は、確かに強くなつた。だが、自分の存在はどこへ行ったのか。

確かに情報収集程度しかできない能力だ。戦闘狂者の彼方バトルフリークには関係ない能力かもしれない。だが、なぜ自分はここにいます？

わからない。

まあ、このまま流されて桂花を救いに行くという単純なことはわかる。

もう救われた少女に自分の主義主張エゴイズムを押しつけ、無理矢理きよつせいてきにこちらの意見に賛同させる。そして終わってハッピーエンド。救われてよかった。敵と同じものを創る必要はなかった。

果たしてそれでいいのか？ 疑問が浮かぶ。

だが、そんなものは完全に狂って、戦闘のことしか頭がない人には届かない。

「ああ、桂花君を救い出せることを期待しているよ」

目障りなモトナリ。

いなくなればいいのに。

不機嫌な顔は崩さない。

わざわざ彼方と一緒にいく理由すらも見あたらない。だって、私たちは、『組織』へ復讐するため、まずは桂花を救うはずだった。

そうなのだ。最初の目的はそうだった。いつ歪んだ。いつ『組織』を倒すという最終目標が桂花を救うことに取って代わった？

わからない。

「おい、行くぞ」

彼方が呆けていた蓮花に声をかける。行ってしまおうのか、桂花の

元へ。

救われた人間は、目標がある人間は、私たちが救うことができるのだろうか？

なんでだろう？ せつかく桂花を助けることができるだけの力を得たのに、何故か蓮花は不機嫌そうだ。

彼方は悩んだ。

考えごとをしているようで、なかなか動きそうもない。早く助けた方がいい。そして“三人で”『組織』に復讐するんだ。そうすれば、過去を断ち切って、新たな道を歩める。

モトナリ先生は、俺に能力の使い方を教えてくれたし殺さなくてもいいけど、やっぱ、ほかの『組織』の人間くらいは殺さないとな。だって、そうだろう。この壊れた世界で、さらに壊された俺たちに、逝く宛などないのだから。

彼方はどうやれば蓮花を動かし、桂花の元へと直行できるのかを、しばし考えた。

仕方がない、無理矢理にでもつれていくか。

「おい！！ 蓮花！！ 行くぞ！！！！」

さあ、桂花の前に目障りな黒装束と、執事を倒さないとな。あいつ等は邪魔だ。俺たちの『組織』壊滅の野望に邪魔だ。

「ああ、行くよ。すまん。ちよつと考え事をしていた」

「うん。大丈夫だよ。さあいこうよ、屋敷へ」

「ああ、分かった。でも行くのは明日にしよう。少しのんびりしたい。最近いろいろあって疲れたからな」

明日？ できるだけ早く行きたいんだけど、ほかならぬ蓮花の頼みだし良いか。

「うん。わかった」

そして、二人は向かう。『強能力者』用の宿に……………

「さて、精神汚染はどこまで進みましたかね……」
二人が去った後、モトナリは一人呟いていた。

十五話、再戦之前編

彼方と蓮花は屋敷の表門にやってきた。正直気が進まなかったが、重い足をなんとかこの屋敷まで運んだ蓮花。わくわくするくらいに軽い足取りで軽快に進んできた彼方。二人は対照的だった。

「じゃあ、行ってくるわ」

彼方はそう言い放った。蓮花はそれにうなずいて、

「私はここで待っているよ。そう昨日はなしたしね」と、答えた。

「ああ、出来れば着いてきて貰いたかったけど、仕方ないか」

「まあ、戦闘の場所に行っただって、私は役立たずだしね」

本心は違う。狂った彼方をみたくないのだ。だが、建前という泥を自分に塗りたくって、外見だけでも取り繕う。

「ああ、わかった」

彼方は駆けだした。

迫ってくるのは、ナイフ！！

その存在感が黒装束との再戦の喜びを彼方に与えた。

ナイフに刺し出すは左手。彼方の『能力』で、飛んできたナイフは真っ直ぐ元の持ち主の方向へ帰っていった。

ガキンッ！！

金属音が響きわたる。ナイフとナイフの交差音だと気づいた彼方は音がした方向へと顔を向ける。

「ひさしぶりだなあ」

狂気に彩られた満面の笑み。それが来訪者である彼方の態度だった。

「壊れたのか？」

一瞬でその状態を見抜く、黒装束。だが、

「まあ。いいか。紫苑のおっさんのせいで俺が勝つ勝負を無駄にし

ちまったしな」

その物言いに苛立つのは彼方。

「おいっ！ 勝ってたのは俺だ」

「は？ 俺だよ」

負けじと言い返す黒装束。だが、同刻に、二人の顔が変わる。

「だが……」、「まあ……」

「今から決着付けりゃあいいよなあ！！！！！！！！！！」

二人の声が重なり響きわたる。そして、彼方が全身に黒装束方向へと移動する。その速度は使っている方も耐えられるのか耐えられないかのギリギリの線だった。

あと秒速一センチメートルでも速くしたら、彼方の体が潰れる。圧倒的速さ。

だが、それを……黒装束も同じことをした。

厳密に言つと、加速と移動の違いはある。だが、傍目に見る分ではなにも変わりはなく、というか見れる人間が多くいるのかも疑問だが、

兎に角二人は同じ速度で交わった。

彼方がステイレットを黒装束の懐へ刺し、黒装束が彼方の腰へとナイフを切りつける。

彼方はステイレットに移動を、黒装束はナイフに加速を。

両者『能力』付きの武器で決着を決めようと、交錯させる。

だが、当たらない。

彼方は確実に刺そうと、下半身の移動を停止させ、下半身を超スピードによって生じる浮遊感で持ち上げた。そのまま弾丸のようにステイレットを刺そうとしていた。

黒装束は加速をナイフ単体にかけた。そして、自分への加速は右前方にずらす。

両者ともに、武器だけを相手に当て、自分は離脱しようという魂胆だった。

だが、その二つの交錯では、武器は当たらない。

ナイフは彼方の下を通り抜け。彼方自身の弾丸は、黒装束の左側を通り過ぎる。

「ちついい！」

二人の舌打ちは重なる。が、双方直ぐに次の攻撃へと思いを馳せる。

次は、当てる。

彼方はステイレットを構え直す。そして、黒装束へ接近。肉弾戦。それが彼方の選んだ戦術だった。だが、武器ではステイレットの方が圧倒的に不利。なぜならステイレットは基本的に戦力をなくした騎士へ、甲冑の隙間から確実に命を奪うように作られた武器なのだ。肉弾戦で横から切れないというデメリットは余りにも痛い。

だが、それでも彼方は肉弾戦を選択する。

だが、黒装束は、逃走した。

「は!？」

彼方の素っ頓狂な声が響く。何が起こったかわからない。

「戦略的撤退だよっ！」

向こうにもまだ何かあるのだ。彼方は納得をした。だが、負けるつもりはない。逃げるスピードを追い越せと、さらにこちらの移動を加速させていった。

一六話、再戦の後編、洗脳

逃げる黒装束。追うのは彼方。できるだけ身体に移動をかけるが、全く追いつかない。黒装束もかなりの加速をかけているのだろう。

そして、追いかけて少しの時が経った。黒装束が一瞬こちらに振り向いた。その後、斜め上に、加速をかけた。

なぜ？ 疑問が頭の中に浮かぶ。だが、少しでも上に上がったのなら、速さは減速されるはず。俺は移動を最高速度に維持しながら前進する。

が、

落下。

衝突。

激痛。

落とし穴。理解した。前方に移動していたら、落とし穴に落とされたのだ。だが、前方に移動をかけていたので、少しの落下をしなから前進する。そして、急ブレーキをかけるほどの暇がなかったのだ。坂道を猛スピードで転がる様な感じになり、衝突した。

気にするものか。

痛みを無理矢理中に押し込む。そのまま上方に移動。

だが、上にでた瞬間ナイフが飛んできた。

「は!？」

驚愕の声があがる。

だが、とつさの判断で、何とか左手を突き出し、ナイフを移動させることに成功する。

「ちっ、よけられたか」

「そう簡単に死なねーよ」

一瞬軽口をたたくと、二人はまた駆ける。

だが、

「やめなさい!」

一つの声で、二人は移動をやめた。

「どうしたあ！」

黒装束が声を荒らげる。ゆっくりと歩いてきたのは……桂花。声の主も桂花と考えて、問題はないだろう。

彼方は戦闘の中断を少し残念に思いながらも、桂花が戦闘を止めた理由について思案する。

「どうした？」

だが、考えても人の思考などわかるはずがないので、一瞬で桂花に聞く方向に頭の中を誘導する。

「お兄ちゃんは……洗脳されている」 え？

理解ができなかった。なぜ俺は洗脳されている？ 洗脳されているはずがない。

頭の中で疑問の声が広がる。何故？ 何故？

「蓮花！」

凜とした声。蓮花を呼んでいる。だが、頭が話に着いてこない。

俺は、彼方は、洗脳されているはずがない！

猛烈に頭の中で悲鳴の言葉を彼方は紡いだが、言葉にはできなかつた。

「どうしたの？」

物陰から蓮花がでてきた。着いてこないとか言いながら、しっかりと見ているじゃないか。

「何でお兄ちゃんが洗脳されているの？」

「!？」

桂花の言葉に蓮花が驚いたようだった。

「モトナリ……」

師匠の名前が蓮花の口からこぼれ落ちる。

「やっぱり。昔と『能力』回路が何も変わっていないもの」

「あいつつう！」

蓮花は走り出した。モトナリに、一発ぶちまけるために。

「「「は?」「「「

いや、話し合おうぜ。とりあえず作戦とか決めないと。この場の蓮花以外の三人はそう思った。

「というかモトナリって誰だ？」

黒装束は名前すら知らないし。

「おい、俺は洗脳なんてされてねえぞ」

「は？」

その言葉に驚いたのは、桂花のようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2496y/>

壊れた世界の能力者

2011年11月20日03時22分発行